



別府市医師会の現況

別府市医師会

理事 馬 場 欽 也

別府市医師会は三期目を迎えた河野会長のもと、役員一同一致団結して会務にあたっています。医師会の現状ですが、昨年12月1日に防衛省共済組合の跡地に別府市保健センター「湯のまち健康パーク」がオープンしました。昭和49年6月に地域保健センターの設立を提唱してから36年の歳月を経て、これまで別府市医師会地域保健センターで行っていた「健診部門」と「小児初期夜間救急医療事業(夜間子ども診療)」を移転することができました。すでに定期健診(特定検診、事業所検診)、がん検診、住民検診や夜間の小児の一次救急など積極的に稼働しています。今後も行政、歯科医師会、薬剤師会などと密接に連携をとりながら別府市民の健康づくりの拠点として運営管理を行っていきたくと考えています。

今年の別府市医師会の第一の重点項目は我々開業医と地域の基幹病院とをインターネットで結ぶ「湯けむり医療ネットワーク」の構築であります。まず2月から新別府病院、その後も続々と公的病院に参加して頂く予定です。これにより紹介した患者さんの同意があれば検査データ、画像など治療内容を自分のパソコンで覗くことが可能になります。最新の医学知識を共有することで、開業医、ひいては地域医療全体の質の向上をめざしたものであります。もうひとつは医師会内のイントラネットシステム「別府市医師会ゆのはなメディネット」の整備です。これにより医師会と会員、そして会員間の情報伝達が速やかになります。すでにこれを利用してレセプトの代行送信を行ったり、胸部や胃の読影においてフィルムを自院でチェックできたり、会員の利便性に非常に役だっています。このような情報化の推進は特に河野会長の肝いりで行う最重点項目ですが、別府市医師会はこの他に医政活動にも積極的に参加しています。「医療政策に関する勉強会」と題して、国会議員や日医の常任理事をお呼びして講演して頂いており、中央情勢や、日医の考え方などに直接接する機会を得て大変勉強になっています。医政に興味がある先生方は遅くまで熱い討論を繰り広げていますが、若手の会員にさらに参加を広げる事が課題の一つです。その他にもまだまだ多くの問題はありますが、河野会長を支え、会員一丸となって取り組んでいこうと考えています。大分県医師会の先生方にはこれからも御指導、御鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

郡 市 医 師 会 だ よ り



強い医師会をめざそう！！

- これからの医療を担う医師のために -

大分市医師会

理事 市ヶ谷 学

私ごとで恐縮ですが、25歳で医師になり、35歳で整形外科の有床診療所を開業して足かけ28年、大分市医師会理事になって6期目になります。この間たびたび診療報酬の改定、引き下げがあり、そして、そのたびごとに患者負担が増えて、それによる受診抑制がポディブローのように効いて収入が減少しています。特に最近は長期処方ができるようになったことや、不景気と相まってさらに受診者が減り、皆さん経営にかなり苦慮されているのではないのでしょうか？私のような地域医療を支える有床診療所は人件費、人材確保ができないなどで、全国的に年々大幅に減って(28,956施設/1980年 10,645施設/2010年)、無床化となっています。また有床診療所のなかにも入院を止めているところがかなりあるようです。

しかしそれでもこのような時期に診療所の開設(ほとんどは無床クリニックですが。)は増加(48,655施設/1980年 89,076施設/2010年)しています。その理由は为什么呢？立ち去り型サポータージュという言葉もありましたね。勤務医の疲弊による開業医へのシフトでしょうか？

ところで近年マスコミで医師不足と騒がれ、医学部を新設するだとか、定員を大幅に増やすだとか、はてはナース・プラクティショナーによる医療行為を認めるとかという議論が交わされています。これらの議論はそもそも将来の人口減少を考慮しているのでしょうか？また現状で本当に医師は足りないのでしょうか？たしかに治療を必要とする高齢者は増えていますが。私が入学したころは、医学部は約40大学しかありませんでしたが、その後一県一医大の政策で医学部が新設され、現在80大学となり、そのうえ定員も増えていきます。その当時は将来医師過剰となり、仕事がなくなるなどと心配していたような気がします。そのため、各国公私立大学医学部の一学年分の定員の合計は1982年(昭和57年)に8,280人でピークとなりましたが、多すぎるということで、厚生省(現厚労省)は定員削減を行い、さらに1997年(平成9年)にも削減が閣議決定され、2007年(平成19年)には7,625人まで減少しました。しかし、勤務医不足や医師の地域的・診療科的偏在の深刻化から医師の需要が増大し、2008年(平成20年)に定員を7,793人に、2009年(平成21年)には8,486人に増員しました。そして2010年(平成22年)には過去最高の8,846人になりました。2011年(平成23年)には8,923人に増員する予定とのことでした。

現在、先進諸外国と比較すると人口当たりの医師数が少ないことは確かなようですが、今の医師数で我が国における医療は本当に不十分なのでしょうか？皆さんはどう思われ

ますか？そう感じるのは、政府の無策，スーパーローテートの導入で医療がいびつな形になってしまったからではないでしょうか？今の制度が続く限りいくら医師数を増やしても医師の地域的・診療科的偏在の深刻さは解決しないような気がします。昔の医局制度が必ずしも良かったとは言いきれませんが、少なくとも現状よりはマシなような気がします。今の医学生は卒業すると医師としてのやりがいより将来の生活の安定，ポストを目指した考えで研修病院を選ぶ傾向にあります。つまり患者のためではなく自分のために進路を優先しているような気がします。とりわけ体力的にきつく，拘束時間が長い，外科，産科，小児科，救急などは選択しない傾向にあるようです。私たちが入局した頃もそうだったのでしょうか？

ともあれ日本の医療は今後どうあるべきか医療に携わっている私たちが大いに議論して，政府に良い医療政策を提言することが国民のために必要ですが，我々の代表を選挙で落とすような医師会の組織力では何を言っても通用しません。もはや医師は医療だけに専念していればよいというわけにはいかない時代になってきています。政治はパワーゲームです。座して待っているだけではいい結果は得られません。とにかく強い医師会，医師連盟を構築して，国政に多くの医系議員を送りましょう。大分県の医師数は，平成20年12月31日現在で，2,975人，医師会加入数は，2,071人（69.6%）ですが未加入者904人のうち880人は勤務医です。もし経済的な理由などで加入が少ないのであればそのことを検討しなければいけないでしょう。

とにかく医療の問題は立場を超えてすべての医師で考えることが必要です。開業医はもちろん勤務医といえども政治に無関心でいいとは思えません。皆さん，医師会，医師連盟に加入しましょう。

ところで今年4月より大分市連合医師会(大分市内の三医師会，大分市医師会・大分郡市医師会・大分東医師会が参加)が発足し，大分市等行政との話し合い・情報の共有化が図られやすくなりました。今後この連合医師会については前記三医師会の連携と団結を強め，政治的にも大きな役割を果たすのではないかと期待しています。

昨年12月発行の大分県医師会会報の巻頭言で，近藤稔県医師会副会長も述べられているように，2011年には日本の躍進と弱者のために強い日医を切望しましょう。



郡 市 医 師 会 だ よ り



近 況 報 告

宇佐市医師会

副会長 徳 光 伸 一

宇佐市医師会は現在会員数101名で、その事業として 日本医師会生涯教育適合学術集会（学術講演会、臨床集談会） 研修会 市民健康講座 スポーツ大会 市の保健福祉等への協力 などがあるが最も精力を費やしているのが、宇佐高田医師会病院と健診センターの運営事業である。その医師会病院がこの2年ほど深刻な経営悪化に陥っており、その建て直しが急務となっている。中島前院長のご尽力により、電子カルテの導入、病院機能評価認定取得、DPC対象病院として認定・実働、最新型の64列CTの導入など機能面での充実、強化がなされたが、御多分に漏れず当院でも新卒後医師研修制度の影響をもちに受け、医師不足となり多方面で悪循環に陥っている。なかでも循環器医師の不足が影響し、急性心筋梗塞などの救急受け入れができなくなっており、近隣市の病院にお世話になりご迷惑をおかけしている。現執行部は中野医師会会長、柏木医師会病院院長を中心として、病院職員全体が一丸となって危機意識を共有し経営改善に取り組んでいるが、更に根本的な問題である医師不足の解消が急務である。宇佐・高田地域全体としてどのような医師会病院が必要とされるか、将来展望を見据えて医師の充実を図りたい。

宇佐・高田医師会病院は今年30周年（健診センターは20周年）を迎える。そのため記念誌の作成、記念式典の開催等を行う予定で、今月準備委員会を立ち上げた。関係各位のご協力をお願いし、将来の展望が開けるような、前向きで意義深い式典になればと願っている。

30周年を迎えて、建物の寿命が40年と言われていることから病院の建て替え問題が課題となっている。政治が機能不全に陥っており、医療行政が今後どうなるか全く不透明のなか、大きな借金をして病院を建て替えても大丈夫なのかという心配も当然あると思うが、医師会病院の役割はあまりに大きく、したがって当然病院の存続を前提として、宇佐・高田地域の医療をどうするのか、行政とも相談しながら会員全体で建設的な議論を深め問題を解決しなければならない。

郡市医師会だより



大分県医学会を終えて

日田市医師会
理事 秋吉貴文

ことのほか暑かった今年の夏、暑さは初秋まで居座り残暑厳しい中、9月12日、日田市で大分県医学会が開催されました。

今回は理事を仰せつかり、担当理事のご指導を受けながら何とか開催まで微力ながら寄与させて頂きました。

日田市医師会は今年の4月より渡邊俊治新会長を迎え、今回就任直後の大役である学会開催でありましたが、両副会長及び学会担当理事の協力のもと、217名もの先生方と関係者の皆様にご参加いただき盛大に学会が終わり一安心しているところです。

今期学会では阪大外科教授 森 正樹先生をお迎えしての特別講演がございました。今後の癌治療を大きく改変するだろう最先端のiPS技術についてのお話でしたが、非常に興味深い内容でした。

日田の田舎にいてもES細胞或いはiPS技術という言葉は雑誌等で認識はしていましたが、実際にその研究に携わっておられる先生のお話でしたので、未来の癌治療の展望が見えてきたようで、すばらしい講演だったと思います。いずれ癌治療も外科的な行為はなくなる時代が来るのでしょうか！ 外科医の私にとっては少し寂しいものがあります。

日田市医師会では、昨年は新型インフルエンザに対応するために、対策委員会を設置し、蔓延時の対処法など検討に奮闘しました。

幸いな事に新型インフルエンザ蔓延という事態を招くことなく、流行期を過ぎましたが今後の感染症対策に良い訓練だったと思います。

今年は新公益法人制度改革に関して検討中ですが、これはどの医師会におかれましても頭の痛い事柄だと思われます。

どの事業にも公益性をもたせることを義務付ける事、或いは過去の優遇課税に対する処置等、今後の長期計画の必要性など、次期新制度移行までにはいろいろな難題が山積みされています。

いずれにしても今のモチベーションを維持したままスムーズに新制度に移行してほしいと願っています。

日田市は平成17年市町村合併時人口76,000人でしたが現在は72,000人で毎年700人程減少していることとなります。

国全体の少子高齢化が進みやがて、社会活動全体が衰退すれば医療・福祉など財政面で少なからず何らかの制度改革が必要になってくるのでしょうか。

地方にあっても例外ではないと先行きが不安になるばかりの毎日ですが日田にとって唯一の明るいニュースはホークスのリーグ優勝です。

時間がある限りホークスの中継を見していますが、中継画面の右隅に日田天領水の文字が見えます。

日田市は連なる山々の美しい姿と豊かな水に恵まれた盆地で、豊富な水量は今も多くのエネルギーの源となっています。

自然と歴史が癒合するこの地が地域活性の源流となるように、ホークスの中継を見ながら願っています。

今後も医師会理事として医師会長の手足となり、多くの医師会員と協力し日田市民の健康を見守って行く所存です。

願わくば来期のタイガースの優勝を夢見て……。





秋に想う

玖珠郡医師会

会長 矢原 澄郎

今年の夏は殊の外暑かった。ここ玖珠高地にも9月初旬38.7 と日本一の高温を記録した程です。九州，四国は台風の定コースに入っていて，年間数回は大雨，高潮でどこかに水害がみられるのが，今年は台風のコースが外れて，上陸したと云う情報すらなく玖珠川も増水して危険を感じる事は全くありませんでした。ところが彼岸を過ぎると寒気が突然にやって来て高齢者は体調をこわす人が多くみられる秋季を迎えています。

今年は診療報酬の改定があり，急性期有床病院に雀の涙の施しがみられましたが，診療所，特に有床診療所は置いていかれました。そして有床診療所は町から消えてなくなっています。

先の参院選では，民主党の政務官が，有床診，特に地方の有床診が必要である事を云っておりました。特に九重町では病院がないので，回復期，終末期の医療で重要なニーズがありますが，大変な思いで続けているのが偽らざる実情であります。

民主党の某大物代議士は九重町でも農家の人々を集めて種々と約束していたそうですがわれわれ町民をバラマキ政策で取りこんで数だけをふやせば良いと言うものではないと思います。日本経済の破綻への道が広がるばかりではないでしょうか。長期的なしっかりとした政策の実行が求められます。さらに，内政だけでなく，外交においても問題が山積みしています。尖閣諸島周辺では，中国漁船衝突事件以来，日中関係は大きく揺れています。民主主義の基本である話し合いを続けることが必要でありましょう。世界の国々との距離は，昔と比べてとても近くなってきています。まして隣国同士なので，産業だけでなく医療や介護福祉についても政治を抜きにして交流を深めたいものです。われわれが政府に望んでいる事は国民が安全で安心して暮せる社会であり，健康で心豊かな生活なのです。病気の人や高齢者などの弱者が安心して暮せる社会作りの政策を実行してもらいたいものです。

そしてわれわれ一人ひとりがしっかりと真実を見る目を持ってYes、Noを言いながらもお互いに協力し合っていくべきでありましょう。



「竹田自慢」

竹田市医師会

理事 安西三郎

竹田の自慢出来るものといえば、まずは雄大な景色そして、水と温泉でしょうか。高台から見る祖母、傾山の凜とした姿、雄々しい阿蘇や優雅な九重連山の山並みは見ていて飽きることがありません。これらの山を目指して県内はもちろん、九州、全国から多くの登山家が集まってきます。阿蘇山系の伏流水を水源とするあちこちの湧水場は、週末多くの人で賑わっています。そして長湯温泉をはじめとし、久住、荻などにも私たちの体を癒してくれる温泉が沢山あり、大勢の人が訪れています。

最近もう一つ自慢出来るものを見つけました。おいしいおまんじゅうです。ある工房で作っているおまんじゅうがなんともいえずおいしいのです。ひとくちほお張ると、口の中に昔ながらのお酒の香りと甘い味がひろがり、子供の頃、夏休みを過ごした懐かしい祖父母の家、すだれ越しに見る庭の景色、家の前を流れる川などまでが一瞬のうちに思い出されます。その昔ながらのおまんじゅうを作っているのは高齢の女性たちです。そのうちのお一人は、毎朝2時前に起きてバイクで出かけ、おまんじゅうを作って8時に家に帰り、ほぼ寝たきりのご主人の朝食の世話をしています。暑い日の夕方、その家の前を通ったとき、その女性がタオルを首に巻いて、歩道に生えている雑草を抜いている姿を目にしました。竹田の町はそんな、元気で、前向きで、そしてけなげな年配の方のエネルギーによって支えられていることを実感します。

最近全国で超高齢者の存在が話題になっています。戸籍上は残っていても、実際には行方不明になっていたたり、すでに亡くなっていたりする例が多いようです。幸い今のところ竹田ではそのような話は聞きません。

竹田のお年寄りたちが、いつまでも元気で活躍出来る様、そして、おいしいおまんじゅうがいつまでも作り続けられる様、私たち竹田医師会員は、エネルギーの一杯つまったおまんじゅうをほお張りながら、少しばかりのお手伝いをさせて頂いています。

山登りと、水汲みと、温泉にお越しの際には、どうぞ皆さん竹田自慢のおまんじゅうを食べて、明日へのエネルギーを補給してお帰り下さい。



私の感じた豊後大野市

豊後大野市医師会

理事 後藤 孝之

豊後大野市医師会は、今年4月に児玉一成会長に交代となり、さらに私が新任理事として医師会執行部に参加させて頂くこととなりました。私にも役割が与えられ、豊後大野市医師会広報、結核審査会、医師会ゴルフコンペ幹事等があります。今回、郡市医師会だよりを書くにあたり、広報担当の私としましては豊後大野市医師会の報告を行わなければなりません。理事として4ヶ月、豊後大野市(当初は大野郡でしたが)に開業しまして約5年の私には医師会報告が十分にできませんので、今回に関しましては私が感じた豊後大野市につきまして述べたいと思います。

開業するまで豊後大野市で常勤医として仕事のしたことの無い私にとりまして、全くの未知の土地でありました。父親の実家が三重町にあり、幼少の頃に年に1回ほど家族で里帰りをした程度のこの地に、まさか自分が開業するとは全く考えておりませんでした。開業当初は、右も左もわからない状態でしたが、時間が経つに従い、この土地に住む患者様や診療に協力して下さいました皆様の温かい気持ちに支えられ、ここまで頑張ってくることができました。

豊後大野市には、別府、湯布院のような全国的に有名な観光地はありませんが、三重町には稲積鍾乳洞、緒方町には原尻の滝等、自然に触れ合える場所が点在しており、私も時折出掛けて行きます。また、来院される患者様におきましては、方言混じりの言葉での感謝のお気持ちや、ご自分の畑で採れた野菜、果物の差し入れなど、この土地に住む人々の心の温もりは、有名な観光地に負けないくらい大きなものと思われま。住めば都とはよく言ったもので、自然に囲まれ、田舎独特の温かさを感じる今日この頃です。

医療に関してましては、今年、県立三重病院と公立おがた総合病院との統廃合が行われます。それに伴いまして、夜間・休日診療や小児の時間外診療など、早急に解決すべき問題としまして、現在医師会にて検討中であります。

今後、豊後大野市医師会執行部の一員としまして、微力ながら会員の皆様や、住民の皆様のお役にたてるよう努力する所存でございます。次回、郡市医師会だよりには、豊後大野市医師会以外の先生方に、当医師会の報告ができますように頑張りたいと思います。



「親睦を通して連携へ」

佐伯市医師会

理事 上 尾 大 輔

佐伯市医師会は今年で63年を迎えます。今後数年の準備期間を経て、医師会史の編さんが計画されています。佐伯市は市町村合併により面積は903平方キロメートルと九州一広い市となりました。そのため同じ市内でも移動に1時間以上もかかる地域があります。医師会がより地域社会に貢献していくため、会員間の一層の連携・親睦が重要になってきます。月に一度行われる学術講演会は、専門外の分野であっても認識を新たにする機会であり、他科の先生と意見交換できる貴重な場です。地域への貢献としては特定健診があり、会員の先生方の協力により定着したものとなっています。

親睦担当を今年から任じられました。新たな試みとして、秋にジャズのライブを楽しむ会を企画しています。ワインを片手にイタリアンを食べ、音楽が好きな先生方には演奏にも加わって頂こうと考えています。演奏者は地元の方でプロとしてセッションの場数を何度も踏んでいるピアノ、ヴォーカル、パーカッションの方をお呼びします。十分ライブを楽しんで頂き、音楽を通して会員の先生方の交流がより親しく近いものになればよいと願っています。その他、毎年恒例の夏のソフトボール大会があります。対戦相手は薬剤師会、歯科医師会、南海病院です。週に1回、3日ばかりで行います。初戦の夜は焼き肉パーティー。最終日は医師会館で表彰式と打ち上げがあります。去年は元気な(?)サンバの観賞つきでした。夏の疲れを吹き飛ばす夜にしたいものです。そして9月には米寿・喜寿・還暦を迎えられる先生方をお呼びしてお祝いの会を開きます。これまたバンドを呼んで盛り上げたいと考えています。このような親睦会が先生方の連携の一助となることを願っています。

佐伯は海・山・川に恵まれた城下町です。国木田独歩がよく登った城山からの眺望は素晴らしく、ふもとは独歩記念館もある城下町の散策が楽しめます。高速道路が佐伯まで開通したことですし、是非佐伯に立ち寄って頂き、城山に登り、自慢の海の幸を味わって頂けたら幸いです。

郡 市 医 師 会 だ よ り



「かえんかえー」

大分東医師会
理事 見 塩 六 生

わが故郷大分市坂ノ市では毎年5月18日より1週間、萬弘寺の市が開催されます。

大分の三大市の一つで1425年前から続いている古い市です。

市が開かれる萬弘寺は大分県で最も古い寺といわれています。

その起源は6世紀頃(伝承では用明天皇元年10月)に用明天皇(聖徳太子の父)が密かに九州(筑紫国~日向国)を巡幸した際、安万郡(海人部)日吉邑(現在の大分市坂ノ市日吉原)において病に罹り、地元の村人達の献身によって回復されたことで、これに感激した天皇はその地に寺を建立することを約束されたそうです。

このとき病氣平癒を祈念して薬師如来像を彫刻した豊国法師が開基であるとされています。そして用明天皇の死後、聖徳太子が父の菩提を弔う為に萬弘寺大伽藍を建立されたそうです(596年造営開始 - 604年完成)。

当時は用明天皇御祈願の靈地として仏徳高く、信者の礼拝は数万を越えたと言われていました。

そして萬弘寺の門前には市が開かれ、日吉浜で獲れた海の幸、丹生台地で獲れた山の幸などの取引が物々交換の形で行われるようになり、7世紀中頃には既に定期市としての体裁を成していたとされています。その後940年前後に発生した藤原純友の乱において萬弘寺は略奪・破壊を受けたようですが、寺の再建と共に市も復活したようです。

応永年間に大友氏第11代大友親著により精舎が再建され、現在の本尊である聖観世音菩薩像が安置され、この観音菩薩の縁日が現在の市の開催期間となりました。

しかし1586年には島津氏が来襲し寺は全焼し後に再建されるも荒廃した状態が続き、江戸時代には廃寺の扱いを受けておりました。

近代になって宗派は創建当時と異なるものの寺としての機能を回復し市も現在と同じく年1回の祭事として行われるようになりました。

以前はその萬弘寺の市の開始を告げるのが5月18日未明に開かれる「かえんかえー」の言葉で始まる、「物々交換」でした。それが2002年から、一般の方が参加しやすくするために市開催中の土曜日に行われるようになっております。

今年の物々交換は5月22日土曜日の未明午前4時の花火を合図に約300名の人出で始まりました。私が小学校の時には暗闇での交換後（かなりどきどきしたものでした）走って帰宅し蛍光灯の下で見て、がっかりした思い出しかありませんが、今年は40年以上ぶりに午前3時30分に目覚まして必死に起床して、医局にあったベルギー製の其有名チョコレートを持って参加してきました。物品が確認できない闇夜の中でこちらの持参品を武器に相手からどれだけ良いものを得るかが勝負です。表紙の写真がそのときの模様です。私は結局久しぶりに出す大分方言で「交換しませんか」の「かえんかえー」がなかなか言いたせないために、物々交換には参加できず、懐中電灯のもと自分のおもちゃを乾燥ひじき（らしきもの）と変えてしまって呆然としていた小学生に、持参したチョコレートはあげてきました。不況のさなか寄付金が集まらず継続していくことはかなり大変なようですが市保存会や坂ノ市商工青年部の方々の努力のおかげで歴史ある萬弘寺の市が今年もわがふるさとでは無事に開催されました。



郡 市 医 師 会 だ よ り



Crescendoの創刊に期待する未来の医師会像

大分郡市医師会

理事 佐藤 慎二郎

大分郡市医師会は一昨年、設立60周年を迎えました。この長い歴史の間、かつて広大であった大分郡は大分市に併合される形で縮小してゆきました。大分市の鶴崎地区、明野地区、大南地区、植田地区、旧大分郡の残った3町が由布市と名前を変えましたが、共に手を取り合って医師会活動を続けています。大分の中心部から東部、中部におよぶ広域の医師会であるにもかかわらず、それぞれの地区医師会が個性を発揮して活発に活動しています。60周年記念として、会員間の連携、親睦を盛んにする目的で会員情報誌の発行や、定期的医師会報だけでなく、crescendoという名前の増刊号を発刊することとなりました。これまでうまく表現できなかった医師会員の声を、幅広く拾い上げることを目的としています。

増刊号Crescendoは半澤一邦先生が会長になってこの2年間で、これまでに4回発行され、いずれも会員から好評を得ています。編集者は野津原の角匡幸先生で、日々スポンサー探しや記事集めに奔走し、ペンを回しながら記者たちに檄を飛ばしています。記事の内容は、目の前の大きな話題である民主党政権交代、長妻大臣による初めての診療報酬改定、大分市の救急医療体制、大分大学病院救急Doctor carの導入、といった力の入った内容から、大分県の味処に自然散策、ジャズなどの趣味紹介など盛りだくさんです。正直言って面白いし、他の医師会会員にも、「これ、いかがです?」とお勧めしたいくらいなのです。

Crescendoとは音や感情が次第に強くなることを意味しています。これまでは医療現場の切実な訴えが日本の医療行政に届いていかなかった。マスコミや保険者側からの過大で理不尽な要求によって医師は疲弊し、反論する言葉もなく、医療に対する情熱を失いかけています。長く続いた国の医療費削減政策によって、医療は慢性的な飢餓状態におかれ、枯れた砂漠にわずかに注がれる水を求めてあっちこっち、右往左往に誘導されて、気がつくとも戻りできない不毛の地へおびき出されてしまったようです。医師会活動を通して、医師同士が、お互い連携して助け合うとか、地域に密着して住民の方々の健康維持のために奉仕する活動も少なくなりました。さらに、医師会理事の先生方は、ご自身の診療が大変忙しいにも関わらず、日々一生懸命地道に奉仕活動をされているのですが、一般会員の先生方にはその実意がわかっていただけていないのではないのでしょうか。医師会は何のためにあるのかという率直な疑問にはっきりと声高に答えてゆかねばならない。こういった医師会員がホントに見たい、聞きたい、話したい話題を提供する素晴らしいメディアであると自負しています。私たちは今後もCrescendoを支持し、惜しまず協力します。最後に担当理事の方々の御尽力に感謝いたします。





医療情報

速見郡杵築市医師会

理事 佐藤 素生

速見郡杵築市医師会の地域の人口は6万1千人で、微減ですが大きな変化はありません。速見郡杵築市、とりわけ杵築市は市町村合併により面積のかなり広い地域です。同じ市内でも車で一時間以上かかる地域もあります。医療の連携と集約化が叫ばれる中、一足早く集約化された面もあり、旧山香町、旧大田村にあった4校全ての中学校が1つに統合されました。多少不便なようですが、スクールバスでわりとうまくいっているようです。

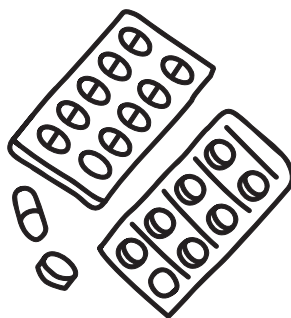
地域地域が広い(過疎)と大変なこともあります。昨年度の新型インフルエンザワクチンの件では良い経験をさせていただきました。杵築市で対象者を限らないワクチン接種医療機関として手を挙げたのは6医療機関でした。その中の4つは市の人口の25%程度の過疎地区にある医療機関でした。程なく幼児ワクチン開始となりましたが、この時期は医療機関が希望するワクチンの量を申告する時期ではなかったため、この4医療機関へ地区の幼児人口の数倍のワクチンが10mlバイアルを含め納入されました。百数十人分納入されたのに数人しか対象者のいない医療機関もありました。ワクチンの広報をし、公衆衛生を説明し、希望者を募り、予定して接種し、余りを買収することは、市町村でも行政機関でもなく、ワクチン接種に協力を申し出た医療機関の責となりました。大げさに例えば、全国のワクチン接種を大分県がやるといったので、全国の対象ワクチンのほとんどを大分県に送り、関東や関西にまで希望者を募り、予定し、大分県に来てもらって接種し、余りは大分県が買収するというようなことです。政治や政策の失敗の責は為政者がとるべきで、末端の施行者に財政的負担まで押し付ける神経は理解できません。

昨今、医療情報の提供や医療の透明化が叫ばれ、薬剤情報提供、医療費に明細が分かる領収書発行と進み、本年四月から明細書無料発行が義務化されました。何でも、誰にでも情報を提供するのが善であるということに違和感を感じるのがしばしばあります。以前、薬剤情報を提供するようになってから急に症状が安定しなくなった高齢の患者さんがありました。大きな病院にも紹介しましたがいっこうに安定しません。よくよく聞いてみると娘さんが医療関係者で、投薬された薬の中の種類だけ飲まない方が良くと除いて

いたのです。その薬がその患者さんに一番必要な薬であったためこの病院を受診しても安定しなかったのです。情報を提供する場合、提供してもらった方が理解できる情報でなければ意味がありません。

また、先日、新患の後期高齢者の患者さんがこれこれの薬を2ヶ月分くださいと言ってきました。初診でそんなに出せませんよと言うと渋い顔をしていましたが、先生は知らないから教えてあげますが、この薬は2ヶ月出せますよと帰り際に言われました。こういった情報や経験はこの患者さんに本当に有用だろうかとしばらく考えました。十数年前、大学病院から一般病院に変わった頃、当時の厚生省からの投薬等の指針がありました。投薬は必ず診察してから行い、急性期の投薬は2日間で、慢性期の投薬は1週間、旅行等やむを得ない場合最大2週間投薬でき、解熱剤や痛み止めは頓服で処方するというものでした。漫然と投薬しないために最低2週間に一度投薬を再考しなさいということでした。一般病院では慢性疾患の場合2週間の処方をしていたので、実際はやむを得ない場合が多いことになっているのだとも思っていました。それから十年もしないで処方期間が延びてきて数ヶ月処方も珍しくなくなりました。基本的な医学の考えが変わったと思えませんが、数週間毎に再考しながら同じ薬の処方を続けるのと数ヶ月毎に処方するのが同じでしょうか。数ヶ月毎に処方しないで投薬することを助長しているように思えます。

情報の正確な意味を理解できるようにしなければ、その情報に意味が無いだけでなく、人は情報を自分の都合の良いように解釈し、大きな誤解を招いたり、有害になったりすることは誰でも経験することと思います。レセプトの正確な意味は医師でも専門とする分野以外では困難な事も珍しくなく、患者さんが正確に理解するには医科点数表の解釈でも理解しなければ不可能と思います。明細書(レセプト)無料発行が義務化の次は何でしょうか。診療録(カルテ)の無料発行義務化でしょうか。これらのことが真に患者さんのためになることを祈ります。



郡市医師会だより



国東だより

国東市医師会

会長 坪井 峯 男

「おもしろうて やがて悲しき 鵜舟かな」は芭蕉の句ですが、鵜舟を「政治」とか「民主」に読み替えれば、ぴったり来るような政治の混迷は、やがて「日本」と読み替えなければならないような気持ちにされる今日この頃です。芭蕉の芸術性をこのような言葉遊びで汚すのは本意ではありませんが、うんざりするような世情が続いております。さぞストレスが、わが身を、辺りを多い尽くしていることと存じます。

しかし第一線、現場に居りますと、それはそれ毎日の仕事を沈々と、恙なく勤めていかなければなりません。

さて国東市医師会は、小規模医師会、会員数も少なく活動内容も大規模医師会のような独自のものに乏しさしたる報告はありません。しかし地域医療のかなりのものが行政単位で縛られております。国民健康保険、介護保険しかり、保健予防、感染予防、学校保健などなどがそれです。医療活動の大部にこれらが関与しております。ここにこそ行政単位に準じた、小さいながらも当医師会の立ち位置があるものと了解しておりますが、少人数で、日常診療に手いっぱい会員ばかりの小規模医師会ですから、できることに限りがあるのが現実です。県医師会、日本医師会のバックアップを大いに期待したいところです。

国東市、姫島村の人口減少、高齢化の問題の深刻さは県下でも先頭集団に位置するものであります。また医師不足の深刻さも今更ながら。地理的特性も半島ならではの独特なものがあります。それゆえ「地域医療を効率的に、システムチックに構築する」の喫緊の課題が重く押し掛かっておりました。国東地域の中核病院は国東市民病院一つしかありませんが、建物の老朽化と医師不足から様々な問題を内包しながらその解決を模索しながらの毎日であったわけですが、ようやく「近代的で国東風」建屋病院改築がはじまります。このことをきっかけに中核病院に期待すること、それと連携した会員診療所、病院のあり方などを再検討し、「国東の地域医療を効率的に、システムチックに構築する」課題に取り組みたいとの思いを会員一同強くしております。

国東半島にも春が訪れ、野山を豊かな色彩が彩り、眼を楽しませ心を休ませてくれます。自然を楽しむにロケーション、材料、素材など事欠きません。弘法大師所縁のお接待などの行事も各地で行われてることでしょう。大分空港にでも用事がありましたら、そのついでにでも、少し足を延ばしていただき海沿いに、あるいはどこかの谷を分け入っていただき国東半島を楽しんでいただけたら望外の喜びです。